遺構から見る下山大工松木左内・松木高造の設計手法

建設工学専攻（修士課程）
建築史研究
m506047　寺本（てらもと）　理恵（りえ）
指導教員：伊藤　洋子教授

はじめに

工匠制度のもと、木割と規矩、絵様と繰形の大工技術は、構造と意匠を踏襲する手段として、護り続けられてきた。また、大工書の流布は技術の普及を図ると共に、技術の標準・規格化の考えを定着させてきた。しかし、明治を迎え西洋建築技術が導入されると、工匠制度も変革を見せた。棟梁の権威は失われ技術の自由な天地が開かれ、大工・宮彫師は時勢の大きな流れに翻弄されることとなる。

研究目的

下山大工松木左内・松木高造の遺構と大工書の木割比較及び妙法寺の絵図分析により、両者の設計手法を検討する。また、同時期に活躍した松木仁家の松木運四郎・松木輝殷の遺構との比較を行い、影響関係を考察し、幕末～明治期に活躍した下山大工の職掌を明らかにする。

研究方法

1. 松木左内の遺構を『下山大工史資料』『山梨県棟札調査報告書』からリストアップ
2. 松木敬仁家所蔵の絵図調査・分析、遺構の実測調査・図面作成
3. 『匠明』『匠家雛形増補初心傳』など大工書との木割比較
4. 棟梁松木運四郎・松木輝殷との影響関係を考察

Ⅰ　下山大工の概要

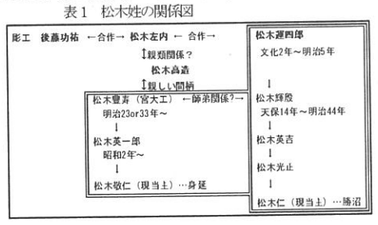
下山大工の歴史は穴山梅雪（ばいせつ）が下山に城を築き、その城下に大工を集住させたことから始まる。後に、組織内派閥抗争や甲府町方大工との縄張り争いなどを経て、甲斐国を中心とした、優れた大工集団となった。農地の少ない河内では、日蓮宗総本山が近くにあり多くの寺院が建てられ、良材が手に入ったことなども後押しし、大工職が盛んになった。幕末には建築技術はもとより、彫刻においても素晴しい技術を駆使し、近世社寺建築の工匠として全国的にもその名は知れ渡たった。

Ⅰ－1　大工棟梁松木左内・高造

松木家の系図は以下の通りである。松木左内は下山大工に属し幕末に活躍をみせた大工棟梁で、左内の作品には、宮彫師の後藤功祐や同じ下山大工であった松木運四郎との合作が残されている。松木敬仁家所蔵の絵図によると文政４年（1821）の生まれである。

松木高造は、明治初期の妙法寺の建築に携わった大工である。藤村式建築の旧春米学校の設計者であるとされ、松木輝殷とは師弟関係である。

表１　松木姓の関係図



Ⅰ－2　勝沼松木仁家の松木運四郎

勝沼の松木家は、下山大工に属し江戸後期から明治期にかけて活発な建築生産を行った大工棟梁の一族である。社寺建築を中心として活躍した松木運四郎の次男、松木輝殷は堂宮建築を父に学び、藤村式洋風建築の創始者として擬洋風建築の造作に転向する。松木左内・高造と同時期に活躍をしていたことから影響関係は大きかったであろう。

Ⅰ－3　彫物大工後藤功祐（こうゆう）について

後藤功祐は明治初期に活躍した、宮彫系彫物師の第一人者とされる人物である。社寺彫刻で知られた関東後藤派の総師であり、維新後は洋風彫刻を取り入れて名を成した。江戸深川に生まれ、後藤弥太郎の養子となり、大師河原村の後藤富五郎に彫刻を学び門人となる。靖国神社神鏡の額縁や、昭憲皇太后所用の洋家具が代表作にあげられる。

Ⅱ　研究対象概要

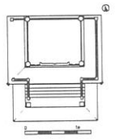
『下山大工史資料』『山梨県棟札調査報告書』松木敬仁家所蔵の絵図より、松木左内・松木高造が関わったと思われる遺構を表２にあげる。

現存遺構においては実測木割を用いて大工書との比較を行い、建築手法を考察する。焼失した妙法寺本堂・鐘楼・開山堂についてはそれぞれ絵図をもとに分析を行い、設計意匠を考察する上で参考にする。

表２　研究対象建造物と関連人物について

件名	所在地	関連人物	年代	現存状況	絵図
薬明神社本殿	富士河口湖町西湖	棟梁松木左内玄	天保11年（1840）	現存	
若宮神社拝殿	南アルプス市白根町飯野	棟梁松本佐内 彫工後藤功祐	安政3年（1856）	現存	
妙法寺本堂	増穂町小室	松木左内玄死	安政5年（1858）	焼失再建	○
妙法寺鐘楼		松木左内玄死	安政5年（1858）	焼失再建	○
佐久神社本殿	笛吹市石和町河内	棟梁松木左内 棟梁松木運四郎 彫工後藤功祐	文久元年（1861）	現存	
飛川神社本殿	増穂町最勝寺	棟梁松木左内 彫工後藤功祐	文久4年（1864）	現存	
妙法寺開山堂		棟梁松木高造	明治3年(1870)	焼失	○
妙法寺子安堂		棟梁松木高造 彫工後藤功祐	明治4年(1871)	現存	○
妙法寺三門	増穂町小室	彫工後藤功祐	明治20年(1887)	現存	

Ⅱ－1　薬明神社本殿

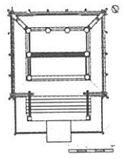


天保 11 年（1840）建立。正面一間、側面一間の一間社流造。正面軒唐破風付、屋根は桧皮葺。擬宝子高欄・登高欄で縁をまわし、脇障子後方には縁を設けない。三手先、象と獅子の禅宗様木鼻、妻飾りに波、向拝中備に龍、手挟に牡丹の彫刻が施される。

Ⅱ－2　若宮神社拝殿

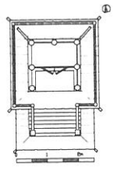
安政３年（1858）に建立。正面六間、側面四間の入母屋造。当初茅葺、現状銅板葺である。疎垂木により構成されるが、内廻りに出三ツ斗、外廻りに木鼻付平三ツ斗の組物、懸魚に雲、向拝蟇股に龍の彫刻が施されている。

Ⅱ－3佐久神社本殿　（県指定文化財）



文久元年（1861）に再建。正面三間、側面二間の三間社流造、正面軒唐破風付。当初桧皮葺、現状は銅板葺である。三手先斗栱を持ち、登高欄、はね高欄。妻飾りは二重虹梁大瓶束、獅子・牡丹の木鼻、手挟に菊の籠彫り、向拝中備に龍など装飾性に富む。

Ⅱ－4　飛川神社本殿



文久４年（1864）建立。正面一間、側面二間の入母屋造。屋根は桧皮葺で、前面に唐破風、棟に直交して両側面に千鳥破風を設ける。向拝柱に地紋彫が施され、三手先斗栱から突入する尾垂木彫刻、全体に波、龍、獏、象、中国伝統に主題をとった人物彫刻など、華やかに飾っている。

Ⅱ－5　小室山妙法寺

妙法寺は、持統７年（693）役行者によって創始され仁王山護国院金胎寺となり、文永 11 年(1274)住職恵頂が日蓮との法論に破れて日蓮宗に改宗。名前も徳栄山妙法寺と改め開山となる。その後、武田家、徳川家康とも関わりのある寺として歴史を残している。本研究対象大工の遺構として現存するものは、松木高造の子安堂のみである。

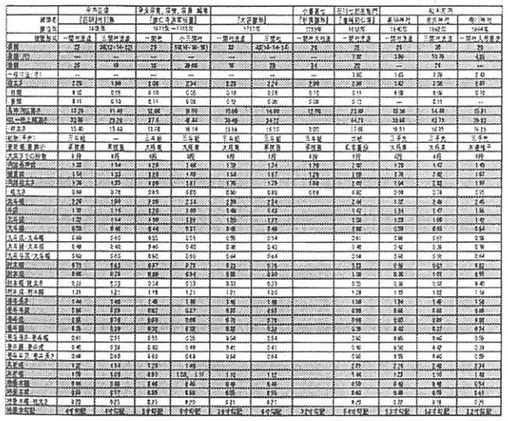
Ⅲ　松木敬仁家所蔵絵図

松木敬仁家には、松木左内・松木高造の署名がなされた幕末・明治初期の妙法寺の絵図が７点残っている。これら絵図は、幾度もの火災により被害を受け、焼失してしまった松木左内の作品を知り得る唯一の手がかりである。明治初期における妙法寺伽藍の各建造物の意匠や下山大工の職掌を知る上でも非常に貴重な資料であるといえる。

・小室山本堂下絵図　安政五年午四月吉日　松木左内玄完壽三十八歳
・小室山鐘楼下絵図　安政五年四月吉　松木左内玄完壽三十八歳
・本堂　廿分一仕様之図　蔓延二辛酉初春　松木玄完正著者
・小室山開山堂下絵図　明治三年午ノ正月吉日　下山松木高造
・小室山子安堂　棟梁松木高造
・小室山祖師堂　一分拾四尺縮　棟梁稲葉関太郎
（他、建物の明記がない絵図が一枚あり）

Ⅳ　大工書との木割比較

下山大工の石川七郎左衛門が著した『匠家雛形増補初心傳』について中心に比較を行うが、この大工書は社殿についての記載しか見られない。四天王寺流平内政信の『匠明』、江戸建仁寺流派系本の『建仁寺派家伝書』、運四郎が所有していた『大匠雛形』、『新撰雛形』も加えて比較に用いる。　表３　木割比較表（一部）



薬明神社本殿では特定の大工書を用いていたとは言いがたい。松木運四郎も関わったとされる佐久神社本殿では、各大工書に比べ柱間に対する柱径が非常に太く縁が広いなどの特徴を持つが、各部では『大匠雛形』に近似する柱比率である。飛川神社本殿においては、地域の大工書である『匠家雛形増補初心傳』と多くの材で枝数の一致が見られた。若宮神社拝殿は疎垂木が用いられ、疎垂木間の長さと柱径が等しく、これを１スパンとして計画されている。また小室山本堂、鐘楼の各材は『匠明』に見られる木割であった。

Ⅴ　絵図の分析

絵図の実寸大コピーからその絵図の縮尺を検討し、実際に各長さを測定して柱間、柱径、各部の寸法を求めて分析を行った。雛形との比較では、主要部材のほとんどにおいて雛形に見られる基本的な設計で決定されていることが分かった。次に、絵図により建物全体のプロポーションの特徴を分析し、意匠における大工の意図を解明していく。

Ⅴ－1　妙法寺改開山堂・子安堂

開山堂は焼失して今はその姿を見ることが出来ない。そのプロポーションは、子安堂同様に内法高さが柱間の同返しになり、屋根や縁、総柱間などにおいても１:１の比率が多く用いられ計画されている。

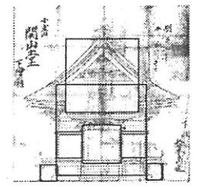


図１：松木高造開山堂の図

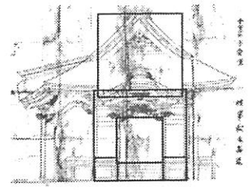


図２：松木高造子安堂の図

Ⅴ－2　擬洋風学校建築

明治初期に仏教排斥がおこると、寺社建築の創設は急速に下火となる。このような状況下、いち早く擬洋風建築に転換を図ったのが松木輝殷である。松木高造は松木輝殷の弟子にあたり、同様に学校建築を残している。両者の擬洋風建築にはプロポーションの比率関係において、共通点が多く見られ簡単な整数比による計画がなされている。高造は寺社建築においても比率を重視していた為、これが輝殷の影響であるとは言いがたいが、新たな試みである擬洋風建築の設計にあたり、プロポーションの比例関係に重点をおいていたことがうかがえる。

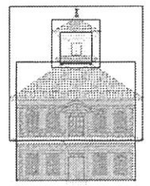


図３：松木高造旧春米学校（明治９年）

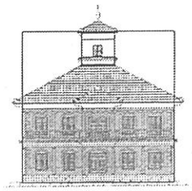


図４：松木輝殷豊民学校（明治８年）

結論

松本運四郎は『匠家雛形増補初心傳』の著者石川七郎左衛門の影響を大きく受けた大工であるが、松本左内においてもその影響が認められた。これは、両松本氏が合作をしていることからお互いに影響を受合っていたこと、また、同地域の大工の関わりが強く『匠家雛形増補初心傳』が下山大工にとって重要な役割を果たしていたということ示唆するものである。一方、松本高造は雛形に基づいた知識を踏まえた上で、プロポーションに重点をおいた設計を多く残した大工であった。輝殷が明治というめまぐるしく変わる時代の中で建築家としての生涯を歩んだように、その弟子である高造もまた時代の過渡期に独自の思想を持って設計を行ったのである。

彫刻にも優れた下山大工であるが、左内・高造の作品において彫工後藤功祐が登場する。当時いたる地域で寺社造営の際、地元大工が建築を施し、遠くの彫物大工に彫刻を委託する請負契約が頻繁に行われたが、これは下山においても例外ではなかった。功祐と松木家の関わりが強かったのは勿論だが、明治になり堂宮建築が混乱期を迎える中、下山大工にとって宮彫師の第一人者である著名な工匠後藤功祐と共に仕事をすること自体が大きな意味を持っていたのではないか。大工集団として生き残りをかけた下山大工は同士と強く影響を受合いながら結束しこの時代に生き、その堂々たる作品を後世に残したのである。

参考資料：羽中田岳雄先生喜寿記念論文集刊行会『甲斐の彫刻・建築力・城郭』2002年　岩田書院、『小室山妙法寺』小室山妙法寺誕生祭実行委員会 2000年、飯貝正義『甲斐百寺』郷土出版社 1996年、伊東龍一『江戸幕府配下の匠たち：関東の彫物大工に関する研究』東京工業大学博士論文 1991年、『近世社寺建築の研究』2号 1990年　奈良国立文化財研究所、山梨県教育委員会『山梨県棟札調査報告書』　山梨県史資料叢書、加藤為芳著『下山大工史資料』2004年　加藤敬仁出版、身延町役場編集委員会『身延町誌』1970年、増穂町役場編集委員会『増穂町誌』下巻 1976年　奈良章枝『藤村式学校建築の調査研究―改修による平面の変遷過程について―』職業能力開発大学校学生論文 1996年　三輪宏子『松木家文書から見る設計図案及び意匠』芝浦工業大学学生論文 2006年